

# 庾信擬連珠初探

樋口 泰裕

## 序

王朝動乱の最中、南朝梁より使者として北朝西魏に赴いて故国の滅亡に遭い、やむを得ず北方王朝で仕官し続けたまま生涯を終えた亡国の詩人、庾信、字は子山（五一三一—五八一）。南朝期のそれと大きく異なる彼の北朝期の文学の出発点を作品の基調という点から考えてみると、様々なレベルでその影を落としている、侯景の乱に始まり西魏軍の江陵侵攻に至るまでの実質五年余りという歴史上の一時期が浮かび上がることは周知のことに属しよう。故国の滅亡、故郷の喪失、家の没落、或いは家族や友人との離別など、北朝期の作品にうたわれる、おしなべて恨みの籠った暗いイメージを帯びた内容は、根本的には梁王朝の崩壊という歴史事実由来すると言つてよい。そうした北朝期の作品の中で、その歴史事実をモチーフとして大きく取り込んだ作品がある。「哀江南賦并序」（以下、「哀江南賦」とのみ称する）、「擬詠懷」二十七首、そして「擬連珠」四十四首の所謂「北朝三部作」がそれである。

北朝三部作について、「失われた過去への思いを、あい異なった三種の様式によって作品化していること自体、庾信の精

神史における江南時代の大きな位置を改めて認識させるに足る」と、興膳宏氏は言う<sup>(1)</sup>。この指摘は、王朝崩壊という歴史事実の北朝期夷信における意味の重さを強調するものであるが、続けて興膳氏も大まかに解説しているように、ここでは、その前提となっている三作の様式の相違に対する視点に注目したい。ここに言う様式とは、ジャンルとも換言し得る作品様式を指しているようが、賦、詩（詠懐）、連珠というジャンルの相違は、そのまま表現様式、及びそれと連動した表現者の認識様式の相違、つまりは文体の相違を、少なくとも夷信三部作においては意味すると本論は考える。即ち一言で言えば、失われた過去への思いであるとか、郷関の思いであるとか、或いは梁王朝興亡史であるとか、三部作の表現内容を概括することは確かにできるけれども、夷信は文学営為を通じて、三者三様の様式を以て、それを表現し、認識しようと試みていたのであった。今、故国の崩壊という歴史事実が夷信文学に重くのしかかっていることはや大前提として、その事実と向き合つて、距離間、或いはかたちを変え、異なる文体を以て三つの大作を産み出した夷信の文学営為のあり方とその具体的様相こそ、重要視したいと思う。

従来の研究において、三部作のうち、「擬連珠」は、直接の考察対象として扱われることがほとんどなかったこともあり、或いは夷信本人の余りに印象的な伝記を前にして、その解釈は概ね同時代史を含めた夷信個人の歴史的経験に還元するに止まっている<sup>(2)</sup>。その意味において、「哀江南賦」に対するのと同じ地平で解釈され、また更には「哀江南賦」の解釈を補う従属的なものとしてばかり扱われることが多かつたようだ。確かに『夷子山集注』の編者倪璠が「哀江南賦」について、

此賦記梁朝之興亡治乱及己世之飄緲。古有詩史、此可謂賦史矣。

此の賦梁朝の興亡治乱及び己の世の飄緲たるを記す。古に詩史有り、此れ賦史と謂う可し。  
と注し、また「擬連珠」について、

信復擬其体以喻梁朝之興廢焉。觀其辭旨悽切、略同於哀江南之賦矣。

信復た其の体「陸機「演連珠」を指す」に擬して以て梁朝の興廢を喩うるなり。其の辭旨の悽切たるを觀るに、略ぼ哀江南の賦と同じきなり。

と述べているのは、梁王朝の興亡史を題材としている点を接点として二作に類似を見るものであり、その見方自体は決して誤りではない。ただ、「哀江南賦」については、それを「記」すとし、一方「擬連珠」については、それを「喩」えるとして、表現方法の相違を指摘する視点こそ、ここでは重要である。もつとも、倪璠はそうした相違を意識していながらも、二作における注釈のスタンスを変えなかつた。従つて「擬連珠」の解釈も「哀江南賦」と同じ地平においてなされていると見なさざるを得ないのであるが、表現方法の相違を指摘するまでが倪璠の限界であつたとすれば、二作に対するその視点を更に認識様式の相違にまで深め、文体的位相を取りこんだ「擬連珠」解釈を試みるのが小論の主な目的である(3)。

倪璠注において歴史事實としての「梁朝之興廢」を喩えていると解釈されるのは、全四十四首のうち、ひとまず其一から其二十までがそれに当たる。従つて、本論における直接の考察対象も、とりあえずその該当部分に止めることとした。初探と題せざるを得ない所以である。また、考察を進めるに当たり、倪璠注、許逸民校点『庾子山集注』(中華書局 一九八〇)を底本として用いた。

一

はじめに「擬連珠」の解釈を進める上での比較対象として、「哀江南賦」における叙述の態度、及びそこから窺える認識様式について、基本的な表現様式と併せながら簡単にまとめておこう。

「哀江南賦」における庾信の基本的な叙述の態度として挙げるべきは、出来事、事実を明確な事実として叙述するといふ意味における叙事的態度である。それは、賦というジャンルの本来的特色である叙事をこととする文体によるものであると考えられようが、ここで特に注意しておきたいことは、それが、たとえば史書と同じように事実性を保持しているなどといった結果的、またある意味、客観的なことではなく、何よりも、王朝崩壊の歴史事実と向き合う庾信の意志的な認識の枠組としてあつたということである。それは、序文の冒頭に明確に示される。

粵以戊辰之年、建亥之月、大盜移國、金陵瓦解。余乃竄身荒谷、公私塗炭。華陽奔命、有去無歸。中興道銷、窮於甲戌。

ああ戊辰の年、建亥の月を以て、大盜國を移し、金陵瓦解す。余乃ち身を荒谷に竄し、公私塗炭す。華陽より命に奔り、去る有りて歸る無し。中興道銷えて、甲戌に窮まる。

「戊辰之年、建亥之月」とは、太清二（五四八）年十月、即ち「大盜」侯景が建業に至った時間を直接述べたことばである。「金陵」も建業の古称として、梁王朝の國都を指すに他ならない。天子の御所、台城の陥落後、庾信が身を逃れた江陵を指す。「荒谷」「華陽」も同様である。江陵に至つて後、庾信は西魏に使いしたまま亡國の人となるが、王朝の再建を図る元帝蕭繹の江陵政權が西魏軍の侵攻によって瓦解したのが「甲戌」の年、即ち承聖三（五五四）年であつた。ここには、他の解釈の余地を与えない具体的な時間と場所が明記されており、これから述べていく対象が、紛れもなく庾信自身が経験した歴史事実であることが明示されている。歴史事実を事実として認識、記述する。それが、「哀江南賦」中の「梁朝之興亡治乱」に対する庾信の認識の基本的なあり方なのである。

そうした認識様式と対応する具体的な表現様式として、後の「擬連珠」との比較において、とりわけ注意しておきたいのは、「哀江南賦」においては、記述の対象となる歴史事実に対して直叙的な表現がしばしば採られるという点である。そ

れは、幾つかの異なるレベルにおいて窺えるが、今、本文中から人物の呼称を例に指摘する。換韻に従えば五十節から成る本文のうち、第十五く十七節の中から例を挙げよう。

護軍慷慨、忠能死節。三世為將、終於此滅。(第十五節)

護軍は慷慨し、忠にして能く節に死す。三世將と為るも、終に此に滅す。

「護軍」とは、倪璠注によれば、台城を包圍している侯景軍に立ち向かって戦死した韋粲のことである。侯景軍は韋粲の首をさらして城内に籠る梁軍に示し、それを見た簡文帝は流涕し、韋粲に護軍將軍の称号を贈ったという記事が、『梁書』本伝に見える。次の例も同様に解される。

尚書多算、守備是長。雲梯可拒、地道能防。(第十七節)

尚書は算多く、守備是れ長ず。雲梯拒む可く、地道能く防ぐ。

「尚書」とは、都官尚書の地位にあつた羊侃を指す。侯景が台城に攻め入ろうとした際、羊侃は雲梯を用いて高所から攻撃してくる賊軍に対し、地道を掘って防戦したという記事が『梁書』本伝に見える。以上の例は、叙述の対象となる人物をその官職によって呼称したものである。また、次の例も見てみよう。

濟陽忠壯、身參末將、兄弟三人、義声俱唱。(第十六節)

濟陽は忠壯にして、身は末將に參ずるも、兄弟三人、義声俱に唱う。

濟陽考城の人である江子一、子四、子五の「兄弟三人」は、侯景に台城を囲まれた際、賊軍に正面から攻撃に当たつて悲劇的な死を遂げた(『梁書』江子一伝)。「濟陽」は、三人の貫籍を用いた呼称であると見なせるであろう。

これらの例は、現代の修辭論からすれば、官職、貫籍といった指示対象の特性に着目した換喩にあたるが、現実の具体的な人物に対し、指示的な機能を全面的に持っているという点で、直叙的な表現であると見なし得る。この他、王朝ないし

地域を指示する表現として、古称がしばしば用いられるのも同様であり<sup>(3)</sup>、従って、「哀江南賦」においては、決して全てにわたって直叙的な表現が採られるわけではなく、実際の絶対数から言えば、寧ろ史的故事を用いて現実の庾信が経験した歴史事実の叙事に代える比喻表現の方が多いのであるが、序文冒頭に示される認識の枠組の中で、また本文中、各所に窺える直叙的表現との関わりにおいて、比喻表現は、先ずは指示的な機能を優先的に持つていると考えられる。その意味において、「哀江南賦」に述べられる記述を庾信の自伝、或いは梁王朝興亡史に直結させた解釈もひとまず妥当性を保持し得るのである。ただ、断っておけば、興膳氏が言うように「庾信の歴史回顧はあくまでも自己中心的であり、また彼に「期待すべきは詩人の眼であって、歴史家のそれではない」<sup>(5)</sup>以上、「哀江南賦」の本質的意義を史書のレベルで見るときではないだろう。ここに指摘した表現上の特色の一つとしての直叙的表現も、他と連関させながら、更に文学のレベルで意味付けられるべきであるが、小論は「擬連珠」の解釈に主眼を置いているので、その問題についてはここで止めることとする。

## 二

## (一) 擬連珠の表現様式

## (1) 連珠の文体について

「擬連珠」には、「哀江南賦」序に窺えるような庾信の叙述の態度、もしくはそこから看取できる認識様式が明示されているわけではない。従って、「擬連珠」のそれを考えるには、作中の具体から検討していかなければならないが、その前に、

「哀江南賦」における認識様式、及びそれに対応する表現様式が、賦というジャンルが本来的に保持していた文体と緊密に関わるならば、「擬連珠」における表現様式を検討していく上で、まず連珠というジャンル一般における文体的特色を確認しておくことは有効な手段となるだろう。

連珠の性質、沿革などを詳細に解説したジャンル論において、最も古いものは、傅玄「連珠序」である。次に部文的に引用しよう。

其文体、辞麗而言約、不指說事情。必仮喩以達其旨、而覽者微悟、合於古詩勸興之義。欲使歴歴如貫珠、易觀而可悅、故謂之連珠。

其の文体、辞は麗にして言は約、指して事情を説かず。必ず喩えに仮りて以て其の旨を達し、而して覽る者は微かに悟り、古詩勸興の義に合す。歴歴として珠を貫くが如くならしめんと欲し、觀易くして悦ぶ可し、故に之を連珠と謂う。

ここには、述べようとす「事情」を直截には示さず、具体的な修辞手段として比喩を用いるという連珠の表現様式上の特色が説かれている。また、古の詩が本来有していた隠喩を用いた諷諭の義に一致するというのは、基本的な表現内容、文章の機能に関する指摘である。文章創作におけるジャンルは、表現の様式、内容から文章機能に至るまで一定程度の規範を文人に課しつつも、時にそこに充分に収まりきれない文人たちの認識との相剋において絶えず変化するものであり、従つて傅玄の定義に後世の連珠諸作がいずれも完全に当てはまるわけではないけれども、主に表現内容、文章の機能という点で広がりを見せつつも、「不指說事情」「仮喩以達其旨」といった表現様式は、後世に至るまで一貫して保持されていたと考えられ、それが連珠というジャンルの文人たちに強く課した規範としての表現様式であったことが庾信以前の作品から看取できる<sup>(6)</sup>。ところで、李兆洛が自ら編纂した『駢体文鈔』に「擬連珠」を収録して、「但だ身世を叙べ、理要に

関わる無し。連珠の別格なり（但叙身世、無閑理要。連珠之別格也）」と述べているのは、文体の問題と無関係ではあり得ないが、併せて収録される陸機「演連珠」との相対における表現内容上の観点により傾いた指摘であり、「哀江南賦」との相対において表現様式を特に問題とする本論とは自ずと立場が異なるものであるから、今は考慮しない。

## (2) 「擬連珠」における比喩表現

以上に確認した連珠というジャンル一般が持つ比喩の多用という表現様式は、庾信「擬連珠」においても濃厚に窺える。其十一を例に見てみよう。

蓋聞天方薦寇、喪乱弘多、空思說劍、徒聞枕戈。是以劉琨之英略、莫知自免、祖逖之慷慨、裁能渡河。

蓋し聞く天方に、寇を薦ぬれば、喪乱弘いに多し、空しく劍を説くを思い、徒らに戈を枕にするを聞く、と。是を以て劉琨の英略、自から免がるるを知る莫し、祖逖の慷慨、裁かに能く河を渡るのみ。

「蓋聞」以下四句は、『詩経』小雅「節南山」の「天方薦寇、喪乱弘多。民言無嘉、僭莫懲嗟（天方に寇を薦ぬれば、喪乱弘いに多し。民言嘉き無きも、僭て懲り嗟く莫し）」に基づくことよって、「天」が混乱した時勢における個人の力量の虚しさを断言する。「是以」以下には、過去の悲劇の例を具体的に挙げてゐる。晋の劉琨は、鮮卑の段匹磾と結託して石勒討伐を図ったが、後に段匹磾に殺された。また、東晋の祖逖は、晋室の復興を志して北伐を敢行して黄河を渡り、黄河以南の地を晋土に回復させたが、結局全面的な回復はなし得なかった。表面上、述べられるのは過去の史実であるが、その背後、もしくは認識の土台に、庾信の同時代史における史実を見ることは自然であろう。倪璠は、劉琨の二句について、侯景の乱平定後、同志として共に侯景と戦った陳霸先に殺された王僧弁を喩えたものと注し、全体で梁王朝興亡史を完成する一連の歴史事実の中の一つを叙事したものとして解釈している。確かにここに述べられる史的故事と倪璠が指摘する



歴史事実との間には、明らかな文脈の相似を見出せる。ただ、注意しなければならないのは、そこに、そうした解釈を決定づけるような、叙述の枠組、或いはその指標としての直叙的な表現というものはないのであって、「兩人行跡相似、故引用之」と倪璠自身述べているように、その根拠は文脈の類似のみによるのである。王僧弁の行跡は、「哀江南賦」においてもうたわれている。

司徒之表裏經綸、狐偃之惟王実勤。横調戈而对霸主、執金鼓而問賊臣。平吳之功、壯於杜元凱、王室是頼、深於温太真。……南陽校書、去之已遠、上蔡逐獵、知之何晚。(第三十一、三十二節)

司徒の表裏に經綸するは、狐偃の王を惟うこと実に勤なり。調戈を横たえて霸主に対し、金鼓を執りて賊臣を問う。吳を平らぐの功、杜元凱より壯、王室是れ頼ること、温太真より深し。……南陽の校書、之を去ること已に遠く、上蔡に獵を逐う、之を知ること何ぞ晚き。

先に確認したように、「哀江南賦」には、歴史事実を事実として記述していくという枠組が設定されているのであって、更にこの段に限ってみても、「司徒」とは、侯景討伐後、その官位を授けられた王僧弁その人を指示する直叙的な呼称なのである。それは、以下に続く具体的行為の主語、或いは叙述の対象を明確に規定してもいるのであり、それによって、具体的な王僧弁の史実に結びつけて解釈することを實現させるであろう。従来の解釈がそうであるように、「擬連珠」の表面上に述べられる史的故事を、庾信の同時代史における史実を叙事したものとして解釈した場合、「哀江南賦」における解釈と比較すると、曖昧さが残ることは否めない。また、次の例を見てみよう。

蓋聞彼黍離離、大夫有喪乱之感。麥秀漸漸、君子有去国之悲。是以建章低昂、不得猶瞻滿岸、德陽淪没、非復能臨偃師。(其九)

蓋し聞く、彼の黍離離として、大夫に喪乱の感有り。麥秀でて漸漸として、君子に国を去るの悲しみ有り。是を以て建

章低昂し、猶お瀟岸を瞻るを得ず、徳陽淪没して、復た偃師に臨む能わず。

「蓋聞」以下には、先ず、国家の混乱が述べられている。倪璠に従えば、その混乱とは、侯景の乱にはじまる梁王朝を滅亡へと導いた混乱である。従って、同じく倪璠が、「此子山所以旧国都望之悵然者也」と注するように、混乱に遭い、故国を去ることになった自己を含むであろう「大夫」「君子」にとって遙かに望むべきは、歴史事実の文脈においては、建業ないし江陵といった南朝であるはずである。しかし、ここにうたわれているのは「瀟岸」「偃師」という、いずれも歴史事実と明確な繋がりを持たない、長安、洛陽の地名なのである。それに対し、「哀江南賦」において、地名、人名などの固有名詞は、歴史事実と繋がるよう、かなり意図的に用いられていることは先に述べた通りである。「哀江南賦」の中から、建業の惨状を述べた部分を見てみよう。

昔之虎踞龍盤、加以黃旗紫氣、莫不隨狐兔而窟穴、与風塵而殄瘁。(第二十八節)

昔の虎踞龍盤、加うるに黄旗紫氣を以てするも、狐兔の窟穴に随わざる莫く、風塵と与に殄<sup>はたん</sup>ど瘁す。

昔は帝の氣に充ちていたが、今や狐や兔の巢窟となり、風塵の中でぼろぼろの状態となったと述べられる「虎踞」「龍盤」は、晋の張勃『呉録』中の故事に基づくことば。三国蜀の劉備が諸葛亮に呉の都、建康に使いさせたところ、鍾山が龍の如く横たわり、また石頭が虎の如く座っている様子を見て、帝王の住むべき場所であると驚いたというものである(『太平御覽』卷一五六所引)。つまり、「虎踞龍盤」は、帝王の住むべき場所を言うと同時に、呉の地を指しており、夷信の歴史事実と明確な繋がりを持っているのである。

無論、根本的に文人は自らの経験から逃れるはずはないから、夷信自身の経験としての王朝興亡史が、「擬連珠」の叙述に全く反映されていないはずはない。「擬連珠」創作においても、夷信は王朝の滅亡という歴史事実と向き合っていたのだらうし、少なくとも、そうした認識を巡らすための素材として、倪璠の指摘する歴史事実があつたに違いない。また、決

から、敢えて排されていると言わなければならない。「擬連珠」全体を通して、そこに示されている叙述は、庾信の同時代史における歴史事実<sup>1</sup>に決定的には繋がらないのである。

「哀江南賦」における解釈の仕方が、無条件には、「擬連珠」に移行できないことが確認されたならば、「擬連珠」を解釈する上で、ひとまず倪璠の指摘する歴史事実を、認識の素材として扱い得るとしても、それを庾信の認識そのものと捉える前に、表現様式自体を再検討する必要がある。単に指示内容を飾り覆うものとしての修辭的側面から扱うのではなく、一つの認識様式として表現的特色を見直すのである。なぜなら、逆説的に見て、その解釈を不自然なものにしている原因は、表現自体にあると思われるからで、先ずは、その表現様式こそが、「擬連珠」における庾信の認識様式として考え得るからである。

## (二) 擬連珠の認識様式

### (1) 比喻表現の特色

比喻的認識（表現）とは、喩えを用いて別の事象を認識（表現）することである。二つの事象間に比喻的關係が成立する時、喩詞と被喩詞の間には必ず共通項、類似性がある。先に見た例もそうであるように、実際に作品に叙せられる史的故事（A）と被喩と考えられる歴史事実（A'）との間には、確かに相似する文脈があつた。従つて、その歴史事実が文人

の認識そのものとはまだ認められないけれども、両者に類似性を認める庾信の認識が「擬連珠」の表現過程の一部を担っているとは認められようし、また、読む者もその共通項を手がかりに解釈を進めることができる。その意味においては、A<sub>1</sub>A<sub>2</sub>という図式も認められるだろう。ただ、「擬連珠」の比喩的認識には、単純にA<sub>1</sub>A<sub>2</sub>とは見なされない関係も窺える。其三を見てみよう。

蓋開解封豕之結、塞長蛇之源、必須製裳千里、敵血幘門。是以開百里之圍、用陳平之一策、盟千乘之國、須季路之一言。

蓋し聞く、封豕の結を解き、長蛇の源を塞ぐには、必ず裳を千里に製して、血を幘門に敵るを須う、と。是を以て百里の圍を開くに、陳平の一策を用い、千乗の國と盟するに、季路の一言を須う。

従来、この章は、梁武帝が侯景の投降を許したことを叙事していると解されるが、庾信の同時代史の実際は、「陳平の奇策」はなかつたのであり、「季路の一言」もなかつたのであって、それ故に建業は賊軍の手に墮ちたのであった。「長蛇の源を塞ぐ」こと、また「百里の圍を開く」ことができなかったのが歴史事実なのである。しかし、作中には、そうした歴史事実とはちようど反対の文脈が述べられている。其四もまた同様である。

蓋開得賢斯在、不籍揮鋒、股肱良哉、無論応変。是以屈倪參乘、諸侯解方城之圍、干木為臣、天下無西河之戰。

蓋し聞く賢を得て斯に在らしめば、鋒を揮うを籍らず、股肱良い哉、変に応ずるを論ずる無し、と。是を以て屈倪は參乘して、諸侯は方城の圍を解き、干木は臣と為りて、天下に西河の戦い無し。

この章は、人材の登用を誤った梁武帝を叙事したものとして従來說かれる。庾信の同時代史においては、侯景の乱が勃発して、屈完、段干木の如き賢者や優れた輔佐の臣に策を委ねず、朱异などの奸臣に任せてしまったが故に、国家は崩壊したのであった。無論、倪璠自身も十分に理解しているところであるが、実際の叙述においては、そうした歴史事実を裏

のうまる。このうの叙述は、もはや單純にAでAを表した比喩ではないし、ましてや歴史事實を叙事したものであり得ない(七)。

以上の例における庚信の認識が、倪璠の指摘するように、侯景の乱における武帝の失策という歴史事實に基づくならば、これらの叙述に示されている認識を獲得するに至るまでの過程には、單純に相似点を見出す比喩的な認識過程を経るだけではなく、自らの同時代史における歴史事實に対する一次的な認識を更に發展させてその裏の文脈を読み取り、史的故事を用いた一般論を新たに導き出す、認識の再構成という営みがあったと考えられる。そうした認識過程においては、倪璠の指摘するような庚信個人の経験に止まっている歴史事實は、作中に述べられる史的故事に対して等価的なものとしてではなく、その下地ないし素材としての関係にあると言える。

## (2) 比喩的表現の特色に見る「哀江南賦」との比較

以上に指摘した比喩的表現を改めて考えてみよう。従来の解釈が説く歴史事實を新たな認識を獲得するための一つの素材であったとすれば、其三、其四における認識は、素材となる歴史事實の文脈を裏返した上で成立している。言わば、「擬連珠」という印画紙に、素材となる歴史事實という陰面を焼き付けて獲得した陽面にあたるのが、これらの例に提示されている認識であると言えよう。そうした表現は、両者に類似点を認めているわけではないけれども、二つの認識の間にはなお連想関係があり、また、連珠というジャンルにおける表現様式の一つとしてあると考えられるので、広い意味における比喩的表現と見なせようが、一般的な比喩表現は、やはり両者に類似点を見出すことで成立するものであり、實際、「擬連珠」「哀江南賦」における比喩表現もそうしたものを基調としている。ただ、先に挙げた例を含めて「擬連珠」の比喩表

現には、単に相似する文脈を共通項とするものばかりではなく、素材の文脈を改変した上で成立する例が確かに特色として指摘できる。其八を見てみよう。

蓋聞謀猷是習、權變須長。時增齊竈、或臥燕牆。是以井陘之兵、如鴻毛之遇火、長平之卒、若秋草之中霜。

蓋し聞く謀猷是れ習い、權變須く長ずるべし。時に齊竈を増さしめ、或いは燕牆に臥す、と。是を以て井陘の兵、鴻毛の火に遇うが如し、長平の卒、秋草の中ば霜ふらるるが若し。

「蓋聞」以下四句は、軍事作戦の重要性と歴史上の具体例が述べられている。倪璠は、王僧弁による侯景の乱の平定を喩えたものと解しているが、「臥燕牆」という比喻表現の共用を考慮すれば、「哀江南賦」において述べられる羊侃と侯景軍との台城の攻防戦が素材になっていると考える方が適切であろう。「哀江南賦」より該当箇所を挙げる。

尚書多算、守備是長。雲梯可拒、地道能防。有齊將之閉壁、無燕師之臥牆。大事去矣、人之云亡。(第十七節)

尚書は算多く、守備是れ長ず。雲梯も拒む可く、地道も能く防ぐ。齊將の壁を閉ずる有るも、燕師の牆に臥する無し。

大事は去りぬ、人の云に亡ぶ。

前四句についてはすでに述べた。「擬連珠」の「臥燕牆」、「哀江南賦」の「燕師之臥牆」とは、五胡十六国の一つ、燕の慕容垂の故事に因るものである。慕容垂は行軍の際、病に倒れながらも、燕昌城を築いて自軍を固めて帰還したという故事が『水経注』滎水の条などに見える。二作において、庾信は、この故事を逆境の中における優れた軍事行動の比喻として用いていると考えられ、従って、「哀江南賦」においては、「燕師之臥牆」という軍事行動が「無」かつたが故に「大事去兮、人之云亡」と述べて、庾信が経験した羊侃の死という悲劇的な歴史事実の文脈を正しく保持させているのである。

一方、「擬連珠」においては、対句を構成する「増齊竈」と同じように優れた軍事行動として「臥燕牆」と述べ、それによって、対する軍隊を一掃してしまうのである。羊侃の史実を素材としていざすれば、この首において、文脈を正しく保

持しているのは史的故事の方で、それによって、優れた軍事行動に関する一般論を提示し得てはいるが、素材である歴史事実の方は、文脈が改変されている。

「擬連珠」における比喩表現の特色的な用法を見てきたが、ところで、「哀江南賦」においては、「擬連珠」とは反対に、比喩として用いられる史的故事の文脈を改変することによって、比喩表現を成立させ、歴史事実を叙事する例がしばしば見られ、表現上の特色として挙げてよいと思われる。今、その例を幾つか挙げる。

五十年中、江表無事。王歛為和親之侯、班超為定遠之使。馬武無預於甲兵、馮唐不論於將帥。豈知山嶽闐然、江湖潛沸。(第七節)

五十年中、江表に事無し。王歛は和親の侯と為り、班超は定遠の使と為る。馬武は甲兵に預かる無く、馮唐は將帥を論ぜず。豈に知らんや山嶽の闐然として、江湖の潛かに沸するを。

「馬武」「馮唐」の二句について、出句の馬武は東漢の將軍。積極的に匈奴を討つことを光武帝に進言した(『後漢書』臧宮伝)。また、對句の西漢の將軍、馮唐は、匈奴問題について天子の相談役となったことが、『漢書』匈奴伝に見える。ここでは、「五十年中、江表無事」という平和時の梁王朝における、統治階層の氣の弛みを批判的に記述しており、二句の表現は、そうした庾信の歴史事実の文脈に沿ってはいるが、一方で、對外的に積極策を推進した馬武、馮唐の二人に関する本来の史実が改変されている(8)。また、次の例も見てみよう。

竟遭夏台之禍、終視堯城之變。官守無奔問之人、干戚非平戎之戰。陶侃空爭米船、顧榮虛揺羽扇。(第十三節)

竟に夏台の禍に遭い、終に堯城の變を視る。官守に奔問の人無く、干戚は平戎の戰に非ず。陶侃は空しく米船を争い、顧榮は虚しく羽扇を揺るがす。

この段は台城の攻防を述べており、末二句について、倪暉は「陶侃、喻王琳也。顧榮、喻羊鴉仁也」と比喩される対象

を具体的に注している。王琳は太清二年に後の元帝蕭繹の命を受けて、米一万石を舟に積み、侯景の包圍する台城へ向かうも、途中、進軍できずに米を棄てて帰還した（『南史』本伝）。その点を考慮すれば、「空争米船」という表現は適切であろう。ところが、比喩に用いられる晋の陶侃は、蘇峻が反乱した際、ともに討伐にあたつた温度に米を送ることで、結果反乱を平定したのであつて（『魏書』僭晋司馬衍伝）、従つて、この比喩表現は、史的故事の文脈を改変することで、比喩として成立しているのである。対句も同様である。比喩される羊祜は、「虚插羽扇」と言うように侯景軍を平定することとはできなかつたのであるが（『梁書』本伝）、比喩に用いられる晋の顧榮は、陳敏が反乱を起こした際、白羽の扇を揮つて軍隊を指揮し、反乱を平定したのであつた（『晋書』陳敏伝）。比喩に用いられる史的故事の文脈を改変することによつて、庾信の同時代史における歴史事実の叙事になり得ているのである。

通常の比喩表現に混じるようにして窺える両作の特色的な表現は、対称的な様相を示しているのであるが、それは何を意味するだろうか。「哀江南賦」において、庾信の記述意識は、自身が経験した歴史事実に対して徹底的に向けられていた。認識の対象はあくまで庾信自身が参加したという意味における、個別的歴史なのである。そのような認識の枠組において、史的故事は一次的には比喩表現の素材なのであり、素材はあくまで記述の対象である庾信の個別的歴史事実の文脈に従うのである。同じように考えれば、「擬連珠」における認識の枠組にあつては、「哀江南賦」とは逆に、個別的歴史が比喩表現の素材になるのであつて、それに対する一次的な認識を出発点として、そこから脱却する方向に認識を展開させていたために、時に素材となる個別的歴史事実の文脈を改変する叙述になつたのではないだろうか。その認識の向かう先とは、自己の経験のレベルに止まっている認識に対して、自己を包括し、埋没させる普遍、一般のレベルにある認識である。個から普遍への認識の深化、その過程こそが、「擬連珠」における認識様式であり、またそれを実現するのが「擬連珠」における比喩的表現の本質的機能なのである（註）。



「擬連珠」中の、連珠というジャンルが要求する表現様式と連動した文人の認識様式、即ち文体を具体的に確認したところで、従来、庾信の同時代史における歴史事実を述べていると解釈されてきたものを改めて見ると、その見方も変わってくる。其一を挙げよう。

蓋聞經天緯地之才、拔山超海之力、戰陣勇於風鱗、謀謨出於胸臆。斬長鯨之鱗、截飛虎之翼。是以一怒而諸侯懼、安居而天下息。

蓋し聞く 天を經し地を緯するの才、山を抜き海を超ゆるの力、戰陣は風鱗よりも勇ましく、謀謨は胸臆より出ず。長鯨の鱗を斬り、飛虎の翼を截つ、と。是を以て一たび怒りて諸侯懼れ、安居して天下息う。

「蓋聞」以下六句には、一般論として優れた為政者の姿が述べられ、「是以」以下二句には、それに対する諸侯の対応、天下の安泰が述べられている。この首について、倪璠は、武帝蕭衍が齊王からの禪位を受け、梁王朝が開朝したことを喩えたものと解釈している。確かに庾信は、ここに述べられる理想的な天子の姿と安定した天下を、初期の武帝とその治世という自らの同時代史上の一点にも見たのかもしれない。しかし、それはあくまで素材の一つである。「擬連珠」における庾信の認識過程を考慮すれば、梁王朝の興亡という一時期の歴史的経験の全体を出発点とし、認識を再構成させて理想としての普遍論を導き出したものとして読むべきだろう。また、其五を見てみよう。

蓋聞邯鄲已危、徒思馬服、薊城去兮、空用荊軻。是以竹杖扶危、不能正武擔之石。蘆灰縮水、不能救宣房之河。

蓋し聞く 邯鄲已に危うくして、徒らに馬服を思い、薊城去ちんとするに、空しく荊軻を用う、と。是を以て竹杖は危

きを扶けんとするも、武擔の石を正す能わず。蘆灰は水を縮せんとするも、宣房の河を救う能わず。

倪璠はこの章について、台城陥落後、名将、烈士も無用となつたことを喩えたものと注し、更に「邯鄲」「薊城」を建業に喩えたものと言う。この例は、庾信が経験した歴史事実の文脈に一致しているため、「哀江南賦」の解釈と同じように、歴史事実還元する解釈に傾きやすいが、以上に指摘した「擬連珠」における庾信の認識過程を考えるならば、やはり個別的歴史を素材として、認識を再構成することによって獲得された、より冷静な普遍的認識であると解すべきであろう。逆に歴史事実還元してしまふことは、「擬連珠」における文体の意義を無視した誤った解釈と見なさざるを得ないのである。

ところで、「擬連珠」における庾信の認識過程が、一般化、普遍化であると思はし得るとしても、文体によつて新たに獲得された普遍的認識は、時に歴史事実と陰画と陽画の関係にあるとはいへ、実質的な変化、発展は余り見られないと言えるかもしれない。しかし、実際、幾つかの篇においては、「哀江南賦」などは明らかに異なつた認識が窺える。それはまた、「擬連珠」における文体の特殊性を証する例ともなるだろう。其十五を見てみよう。

蓋聞三世用兵、既非貽厥、陰謀累葉、必以凶終。是以李都尉之風霜、上蘭山而箭尽、陸平原之意氣、登河橋而路窮。

蓋し聞く三世にして兵を用うれば、既に貽厥するに非ず、陰謀葉を累ぬれば、必ず凶を以て終わらん。是を以て李都尉の風霜、蘭山に上るも箭尽き、陸平原の意氣、河橋に登るも路窮まる。

「蓋聞」以下の四句は、『史記』王翦伝に見えることば、「夫為將三世者必敗（夫れ將と為ること三世なる者は必ず敗る）」に基づいて、家風に関する原理を断じ、続く「是以」以下に、家を存続できずに無念の死を遂げた人物の具体例として、李陵と陸機を挙げている。この章について、倪璠は、梁王朝の滅亡に際し、胡僧祐、朱買臣、王褒ら、武人たちの失墜を喩えたものと注しているが、それは恣意的な解釈に過ぎるだろう。「哀江南賦」との表現上の相関で考えるならば、素材と

なっているのは、侯景の台城侵攻を防ぐために戦死した韋粲に関する史実と見る方が適切である。「哀江南賦」における該当箇所を改めて引用しよう。

護軍慷慨、忠能死節。三世為將、終於此滅。

この部分が韋粲についての史実を記すものであることは先に述べた。「三世用兵」「三世為將」と、両者の表現に明らかな類似が見られることから、「擬連珠」其十五に展開される認識の中心的素材は、恐らく韋粲に関する歴史事実であったと考えられる。「哀江南賦」においては、同じく戦乱で非業の死を遂げた諸將と共に、史実として提示しつつ悲劇の対象として記述されているのに対し、「擬連珠」においては、それを運命論的な歴史的必然として捉える、冷静な原理一般に踏み込んだ認識を獲得していることがわかるであろう。同じ史実と向き合いつつも、二つの認識は実質的に異なっているのである。それは両篇の文体の相違によるのではないだろうか。王朝の滅亡という歴史事実と向き合い、自己の経験のレベルに止まる、もしくは拘る以上、そこには自ずと悲哀感情が纏るだろう。そのレベルに拘って認識を突き進めていく「哀江南賦」に対して、その自己の経験のレベルから、自己を包括し、埋没させる普遍、一般のレベルへと認識を深めるのが「擬連珠」の文体であったならば、其十五において庾信は、その普通のレベルの深み中に、本来生々しい歴史事実をしずめることよって、そこに纏わる悲哀感情を埋没させると同時に、原理的に歴史事実を見つめる冷静な視点を獲得し得た、と考えられるのである。

もつとも、「擬連珠」の全てにわたって、「哀江南賦」における悲哀感情が残らず解消されているわけではない。考察対象とした其一から其二十に限っても、素材であるべき歴史事実の生々しさを残存させ、完全に普遍化しきれていないもの、またそれ故、自己の経験のレベルに意志的に拘り続けるわけでもなく、且つ自己を振り切っているわけでもない、認識の深化に不徹底さが窺える章も幾つか見られる。しかし、激しい認識感情が底流し、またしばしば突出する「哀江南賦」と

比較すれば、「擬連珠」に示される認識は、批判的というよりは教訓的であり、また悲傷感というよりは厭世感が強いと言え、全体を通じて、相対的に冷静な認識が提示されているのであって、それは、やはり個から普遍への認識の深化を促す文体を通じて認識を表出しているからであると考えられるのである。

## 結

庚信「擬連珠」について、「哀江南賦」との比較を通じて、その表現様式及び認識様式を検討し、新たな解釈のあり方を試みた。改めて言えば、直叙的表現を交えながら、庚信が経験した歴史事実を事実として認識、記述するという枠組において叙述が展開していく「哀江南賦」に対して、「擬連珠」は、連珠というジャンルが本来的に持つ比喩の多用という表現様式が庚信の認識様式と連動して、庚信が経験した歴史事実を素材としつつ、個から普遍へと認識を深化させているのであった。そうした認識過程を経ることによって、より冷静な一般論を獲得し得たのである。

本論は、「擬連珠」前半を対象としたものに過ぎず、また考察の方法上、比較対象を「哀江南賦」に限ったことにより、「擬連珠」の全面的な解釈には、なおほど遠いと言わざるを得ない。今後も引き続き、「擬連珠」について考察を進めていきたい。

## 注釈

(1) 『望郷詩人庚信』二二二頁（集英社 一九八三）。

(2) 従来の研究において、庚信「擬連珠」を直接の考察対象としたものには、横山弘「陸庚連珠小考」（『中国文学報』第二二冊 一九六八年四月）がある。対句の形態などから、認識様式、更には文人の世界観にまで言及する横山氏の解釈には得るものが非常に多い。ただ、氏は「連珠の可能性」を求めることに主眼を置いて、あくまで庚信の作を陸機「演連珠」との相対で捉えており、従って、「擬連珠」を「哀江南賦」との相対で見ること、庚信文学の可能性を模索したい本稿と考察の立場が異なっている。

(3) ここでいう倪璠の二作に対する注釈のスタンスとは、作品に綴られたことばに基づく典故を指摘した上で、それが具体的に庚信が経験した如何なる歴史事実を述べたものであるかを説くことを旨とする注釈の姿勢を言う。「限界」とはいえ、あくまで注釈家である倪璠に、解釈のあり方の非を求めるべきではなく、部分的に修正されるべき箇所はありながら、その典故と歴史事実の指摘は、現代においてもなお尊重すべき詳細精確さを充分に保っている。

(4) 建業を「呉」或いは「金陵」、江陵を「楚」、また西魏を「秦」などと表現する例がそうである。

(5) 前掲書一八八頁。

(6) 傅玄以降の連珠について述べた主要なジャンル論としては、劉勰『文心雕龍』雜文篇、沈約「注制旨連珠表」、吳訥『文章弁体』序説、徐子曾『文体明弁』序説、王兆芳『文体通釈』、吳曾祺『文体趣言』などが挙げられる。また、庚信以前の連珠諸作を簡単に概観すると、漢代においては、揚雄、班固、蔡邕、潘勗の作が現存し、それらは、いずれも

治世術などに言及した政治論である。錢鍾書（『管錐編』全晉文卷四六）、高橋和巳（『陸機の文学とその伝記』、『中国文学報』第十一冊 一九五四年十月、第十二冊 一九五五年四月）の両氏は、それらの諸作に比興性は含まれないと述べるが、少なくとも表現方法としていずれも比喻を多用している。六朝期のものとしては、曹丕、王粲、陸機、謝恵連ら、多数の文人の作が現存し、そこでも比喻表現は一貫して多用されている。その一方で、曹丕あたりから、政治論のみならず、自らの人生観、或いは処世観を述べるなど、表現内容において広がりを見せている。古来からの連珠に関するジャンル論、及び現存する連珠諸作は、横山弘校録「歴代連珠集（一）」（『天理大学学報』二四号 一九七三）、「歴代連珠集（二）」（『女子大文学』国文篇第二八号 一九七七）にほぼ網羅的に収められている。

(2) 言語化した表現として窺えなくとも、「言外の意」によって、同時代史を述べているという反論も考えられるが、それでは、なぜ（『哀江南賦』の如く）史実をそのままの文脈で述べなかつたのかという問に答えたことにならないし、依然として、表現の問題は棚上げされたままである。

(3) 出典の『後漢書』臧宮伝には、馬武の上言に対して、「（光武）帝不許、自是諸將莫敢言兵事」と見えるので、それを考慮すれば、この句に限っては、文脈の相似に着目した通常の比喻的表現であるとも考えられる。

(4) 普遍的認識は、史的故事を用いて示される場合が圧倒的に多いが、時に自然界の事象を用いて提示されたりもしている。そうした場合にあっても、やはり個性性が消され、万人が共有し得る普遍論に向かうものとして、全く同様の認識過程を経ていると見なし得るであろう。